

# 明石プランにみる1950年代の音楽科カリキュラム編成の展開

## —総合的なコア・カリキュラムから教科カリキュラムへ—

### A Study of Curriculum planning of Music Education during in 1950's

菅 道 子

Michiko KAN

2004年10月15日受理

This study analyzes how the Akashi Plan was reformed in the 1950's from a core curriculum to one organized by subjects, with the purpose of clarifying the practical materials and characteristics of music education.

The Akashi Plan was first made in 1949 based on the idea of a core curriculum. Then the reform of 1953 made the curriculum focus on personal achievement level. In the next reform in 1957, the curriculum plan became organized by subjects.

Through this process, the materials and activities for music education changed as follows:

- 1) In the 1949 version, the materials were chosen according to the theme of core study for singing or other group activities such as concerts, but this style could not successfully improve music skills.
- 2) In the 1953 version, the materials focused on acquiring music skills and knowledge according to personal achievement level.
- 3) In the 1957 version, music class was taught based on the unit of music's subject and considering achievement level of music skills and knowledge.

#### はじめに

戦後の教育課程改革は1950年前後に興隆し、師範学校附属小学校を中心に多くのコア・カリキュラムプランを生み出した<sup>1</sup>。しかし、その後の学力低下批判のもと、生活を中心とした経験学習から教科の系統学習重視へと移行して行った。ただし、コア・カリキュラム編成にはいくつものバリエーションがあったため、その移行過程もそれぞれの編成原理によってなされていたと考えられる。

その原理を明らかにするためには、個別のカリキュラム・プランの全体構成をみるとともに、各教科の教材構成の移行過程と原理を見ることも必要である。この点について音楽科では、1950年前後に子どもの興味関心や生活に即し、経験学習を重視するものとして音楽科内でも単元学習が盛んに試みられたことが知られている。

津田正之は、この単元学習と従来型の楽曲を単位とした教材構成との矛盾・葛藤とを丁寧に考察し、第一には、現場の教師たちから音楽技術の系統的学習が困難であり、音楽の純粹美に触れる度合いが少なくなること、グループ学習により児童の取り組み方が偏りをもつことなどの批判が高まって行った経緯と、第二には、教育界全体の「学力低下」問題の改善という動きの中で単元学習が衰退していったことを明らかにして

いる<sup>2</sup>。また、菅は雑誌『教育音楽』の変遷を通して音楽科の教材構成が1950年代の単元学習を試みながらも複数の楽曲教材を一つの単元にまとめ、複数活動を行う形態は内容の統一性を保てず、不自然なまとまりとなったこと、知識技術の系統性を確保できないといった限界から、次第に一つの楽曲教材を単位とした教材構成へと移行していく経緯とを明らかにした<sup>3</sup>。

しかし、これらはあくまでも教科内での教材構成の変遷やその要因の解明を目的として検討したものである。カリキュラム全体の編成と教科内での教材構成は相互に密接な関係をもつものであり、その編成原理や特質を明らかにするためには、双方の視点から分析することが必要だと考える。

本稿でとりあげる明石女子師範学校附属小学校（以後明石附小）は戦後のコア・カリキュラムの代表的な実践校である。磯野一雄は戦後のコア・カリキュラムを類型化し、その代表校として明石附小、新潟第一師範学校男子部附属小学校、奈良師範学校女子部附属小学校のカリキュラム・プランを取り上げている<sup>4</sup>。

また、拙稿(1999年)において検討したように、1949年の各プランのコアと音楽学習の関係のさせ方には以下三つの特徴があった。第一に社会科的内容をコアにもつ新潟第一師範学校男子部附属小学校の新潟プランはコア（中心学習）と「基礎学習」としての「音楽」

との関係はそれほど強いものではなく、同じ題材の教材を活用する範囲に留まっていた。第二に社会科の内容と理科的内容さらに生活題材をコアの内容としていた兵庫師範学校女子部附属小学校の明石プランは、その中に音楽や他教科の内容も統合的に含めており、「基礎学習」としての「音楽」との関連性も図る総合的なカリキュラムをもっていた。第三に社会科的内容の「単元」とは別に教科外活動やクラブ、学校行事をもう一つのコア「日常生活課程」とした奈良師範学校女子部附属小学校の吉城プランは、三層構造をもち、音楽は「日常生活課程」と密接に結びつきながら創造的表現活動が積極的に行なわれていた<sup>5</sup>。

この中で明石プランは「中心学習」の内部に音楽活動を含み、その関係が密接であることからコア・カリキュラム編成から教科カリキュラムへの移行過程は、三校の中で最も動的な変化があったと考えられる。

本稿は1949年の明石プランのカリキュラム編成を前提とし、1950年代のカリキュラム全体の改編の過程を辿りながら、音楽科の教材構成が教科統合の総合的な学習の試みから音楽科内の主題によるまとめ、或いは楽曲単位へと変化していく過程の編成原理とその特質とを解明することを目的とするものである。

## 1. 総合性をもつ1949年の明石プランのカリキュラム構造と「音楽」の位置づけ

### 1.1. カリキュラム全体を統合した明石プラン

1950年代のカリキュラム編成を辿る前に、起点となる1949年のカリキュラム編成について拙稿(1998)に基づいて整理しておく<sup>6</sup>。

明石附小は、戦後1948年の7月と11月に明石プランを発表し、カリキュラム運動高揚の一つの契機を生み出すこととなった。このプランは「1. 教育の全体計画に基盤をもつ、2. コア・カリキュラム(生活カリキュラム)に基盤をもつ、3. コミュニティーに基盤をもつ」という方針のもとに作成され<sup>7</sup>、1949年に附小は『小学校のコア・カリキュラム—明石附小プラン—』が出版された。

1949年のカリキュラム案で示されたカリキュラム構造は「中心学習」と「基礎学習」から成り、さらに「基礎学習」は「情操」(「文学」「音楽」「図工」と「技術」(「言語」「数量」「其の他」)、「健康」の3領域からなった。この「基礎学習」の中の領域は、例えば、「文学」と「言語」が「情操」と「技術」の一部となって分化しているように、従来の教科とは異なる、いわば「広領域」の区分がなされていた。

### 1.2. コア・カリキュラムの中の「音楽」の位置づけ

では、1949年の明石プランでは音楽はカリキュラム全体の中でどのように組織化されていたのだろうか。1949年の資料では「本当に児童の能力や興味必要に適

したしかも社会の要求を満たす音楽指導をしようとするためには、どうしても在来の『音楽科の学習』という概念から児童の直接的な活動経験を重視した統合学習へ移行する必要がある<sup>8</sup>と児童の活動経験を重視し、教科枠をはずした統合学習の必要性が述べられていた。第3学年の単元を例にその実際をみてみよう。

特徴的なことは、明石プランの第3学年で設定された10単元はすべて音楽活動を含んでいたということである。これは1949年の新潟プランが5つの大単元をもち、そのうち一つも音楽活動を含んでいなかったことと比しても、対照的であることがわかる<sup>9</sup>。

コア内の音楽活動には大きく二種類あった。一つは単元の内容に関連する題材の楽曲を歌うという活動であった。例えば、単元5「日本工具を見学しよう」では「工場のうたをうたう」活動があり、単元6「乗物や道の劇をしよう」では「登校の歌」を歌うといった例である。こうした歌詞題材によって関連性をもたせようとする結び付けかたは音楽の他教科や中心学習との関連のさせ方としては最も典型的なものであった。

もう一つは、創作表現を取り入れている活動であった。さらにこの中には、コアの学習のまとめとして劇活動を行うもの、あるいは学芸会のように創作表現活動自体が目的となるものというように、内容からみると二つのものがあつた。

表1はコアの中で音楽の創作表現の活動を含んでいたものと「音楽」の中でそれに関係した活動を取り出して整理したものである。

表1のように、単に関連した題材の歌を歌うだけでなく、学習内容に直接かかわる形で創作表現活動を組織する単元は10単元中7件と多かった。例えば単元3「明石のまちの模型を作ろう」では、「明石市の自然をたたえて歌、劇、踊りをつくる」という総合的な活動が計画されている。またこれに関連して「基礎学習」の「音楽」科目では「即興旋律をつくる」活動がある。これは明石市の自然や交通機関や役所などの社会機能を学ぶコアの学習のまとめの方法として劇がとりいれられている例である。

また単元9「私達で楽しい発表会をしよう」は学芸会の計画から始まり、ダンス、劇、歌の練習、案内状の送付、飾り付け、当日の進行など企画運営を含めた総合的な創作表現活動の単元である。学習のまとめというよりは創作表現自体が学習の中心的内容となっている例である。「基礎学習」の「音楽」科目ではこれに関連して「自作楽器による演奏発表会をする(太鼓、拍子木、草笛、竹笛、木琴)」という、楽器作りと発表会という新しい学習の試みが示されている。

戦後のカリキュラム改革がアメリカのカリキュラム理論の影響を受け展開してきたことは周知の通りである。なかでもヴァージニア案(Virginia Plan)やカルフォルニア案(California Plan)は『学習指導要領社

表1 1949年 第3学年の「単元」の中の創作表現を含んだ音楽活動と「音楽」のコアと関連のある活動

番号	単元	「単元」の中の創作表現を含んだ音楽活動	「音楽」の中でのコアと関連のある活動
1	たのしい三年生のくらしをしよう		
2	美しい庭園をつくろう	○屋上から五月の自然を展望し印象文をつづける。 ・初夏の美しさを歌にする。	●即興旋律をつくる
3	明石のまちの模型を作ろう	○明石めぐりをする。 ・明石市の自然をたたえて歌、劇、踊をつくる。	●即興旋律をつくる。●歌曲「みなと」をうたう。
4	私達で生物を育てよう		
5	日本工具の見学をしよう	○見学後の研究、整理をする。・楽器をつくる ・工場のうたをうたう。○慰安会をひらく。・演芸のプログラムを編成する。・招待状を出す。・うたのけいこをする。	●拍子木、笛、木琴等をつくる ●歌曲「きかい」を歌う。 ●歌曲「十五夜」「ぼんおどり」ハーモニカ、木琴、カステネット、トライアングル等で伴奏する。
6	乗物や道の劇をしよう	○三年生の児童の通学要覧をつくる。 ・脚本をかく・舞台装置の工夫・プログラムの選択と練習 ・劇遊戯をする・見方と反省及雄後批評・登校の歌。 ○乗物と道の遊戯をする。・レコードの選択と練習	●歌曲「汽車」をうたう。二部合唱にする。 ●歌曲「おまわりさん」を聴唱する。 ●歌曲「ぼくらの学校」をうたう。 ●歌曲「電車」をうたう。
7	身の回りのものを上手に使う		
8	身体を丈夫にする工夫をしよう	○休養と娯楽の時間の遊びを工夫して実行する。 レコードをきく。・うたをうたう。	●簡単な旋律楽器(お琴、ハーモニカ、笛)の構造を知りならしめる。
9	私達で楽しい発表会をしよう	○学芸会の計画を立てる。・曲の選曲。○映画館や興行場の見学をする。 ○演技の練習をする。・ダンス、台詞うたの練習 ・間奏曲を選択する。○案内状の発送をする。○会場の装飾を工夫する。 ○接待の準備をする。○学芸会をする。 ○お客様との沢貝をする。○自由研究発表会をする。 作品展覧会をする。○学校音楽会に参加する。 ○いろいろな発表会の反省をする。	●歌曲「花や」をうたう。 ●歌曲「可愛い、魚屋さん」をうたう。 ●歌曲「こがね虫」「七つの子」 ●自作楽器による演奏発表会をする(太鼓、拍子木、草笛、竹笛、木琴) ●斉唱「こぎつね」 ●輪唱「かねがなる」をうたう。
10	仲のよい友達をたくさん作ろう	○他の学校の三年生と交換会をする。	●歌曲「手紙」をうたう。拍子、リズムの要領。 ●詩に自由旋律をつける。 ●独唱、斉唱、輪唱を練習する。 ●歌唱教材による合奏。

(兵庫師範女子部附属小学校『小学校のコア・カリキュラムー明石附小プランー』誠文堂新光社、1949年より作成)

会科編』及び『補説』のベースになったといわれている<sup>10</sup>明石附小のカリキュラム編成の方針に関しては、とりわけカリフォルニア案の影響を強く受けていたと考えられる。

1948年に二つのカリキュラム案を紹介した倉沢剛はカリフォルニア案の編成方針について「社会科＝理科の単元が学習の中心にたち、一方には読方・書方・算数などの技能が、単元学習に必要な用具として入り、他方「音楽・図画・演劇などともに、学び得た社会的な知見や心情を表現する手段を子供たちにあたえる」とし、「芸術的な表現面との総合によつて、それぞれがもつとも教育的なものになる」<sup>11</sup>と述べている。

カルフォルニア案は、コアを中心にカリキュラム全体が総合的に編成されること、また用具としての技能とともに、創造的な表現活動を積極的に取り入れられることが特徴としてあげられていた。

また、明石附小の清水一郎も1949年11月に出版した『中心学習の実践』(誠文堂新光社)や『カリキュラム』中で総合的な表現活動の一つとして劇活動について言及している。彼は劇活動を「劇遊戯」の言葉であらわ

し、「児童が熱中して、然も効果ある学習をすすめる為にはいかなる学習活動の形式がよいかという事は多くの人々の研究の対象であるが、劇遊戯はその一つ」であると述べ、「児童が熱中して、然も効果ある学習をすすめる為」の形式として捉えていた<sup>12</sup>。

明石プランでもその考えを反映し、1949年度の資料では「自主的、創造的自己表現の能力を本校教育原理の一つとして重視」とし<sup>13</sup>、コアの中には「創造的自己表現」活動となる音楽や踊り、劇などを取り入れる方針を出している。

中心学習の総括の方法、また創造的自己表現の活動の両面の役割を担うものとして「芸術的な創作表現」の活動を取り入れたことは明石プランの重要な特徴であった。

しかし、実際にこうした「創造的自己表現」のための創作表現活動がどの程度なされたかは不明である。

第3学年の例をみても1949年6月に作成された「単元展開の資料と手引き(試案)3 明石のまちの模型をつくろう」には『小学校のコア・カリキュラム』の資料とは異なる事例が示されている<sup>14</sup>。第一類型では中

心学習の「美しい明石をたゝえて歌をつくる」活動を受けて、基礎学習では「作曲法の初歩（てん充法による作曲）」を行い、四小節のある部分の穴埋めをする作曲を行っている<sup>15</sup>。これはドリル的な練習であり、明石をたたえて作曲し、作品として表現するには距離のあるものであった。また、「五 模型展覧会を開く」活動の中の「楽しく歌をうたう」に対して、「基礎学習」では「歌曲『みなと』『リスの一日』を聴唱する」活動が示され、「みなと」については「中心学習で『たのしく歌を歌う』のところで、皆でこの歌の練習をして歌う。ワルツ風であるから、楽器をいれてみたり、踊りに創作したりするのもおもしろい」とある<sup>16</sup>。

上記の中心学習の題材にあわせた活動は児童の総合的な経験を充実させる、あるいは学習のまとめとして設定されたと考えられるものの、音楽的内容のまとまりがなく、この単元以前に技術的な裏付けがなければ、そこでの学習を充実させることは難しいことがわかる。例えば、単元9「私達で楽しい発表会をしよう」に関連した「音楽」の「自作楽器による演奏発表会をする」活動について、当時音楽を担当していた神谷好は、「どうせ、あれでしょうね。これ簡単な、木ぎれでたたくとか、あれでしょうね…木琴を作るというのは、できないものね、普通。笛も」と楽器づくりのことを話している<sup>17</sup>。

こうした状況からすれば、1949年の明石プランで設定された創作表現の活動を行う単元においても、「中心学習」と知識技術の習得を行う「基礎学習」とを有機的に接合する具体的な学習構成は十分に把握されていなかったと考えられる。

## 2. 三層からなる1953年の明石プランのカリキュラム構造

### 2.1. 1953年の「日常生活課程」を加えたカリキュラムの構造

1950年度以降、全体的なカリキュラムは1956年度まで作成されなかった。ただし1953年度に作成された紀要資料によれば、1949年のプランが「集団的基準カリキュラムとしての教育計画とすれば、今回のそれは、一人一人を生かす基準カリキュラムとしての教育計画といっても差し支えない」と記されている<sup>18</sup>。この年度が個人差を生かすカリキュラムに向けての本格的な改訂作業の一つの分岐点となっていたことがわかる。

それは「個人の成長と形成に、その本来のねらいをすえるべき教育の念願が、単なるアイディアに終止することなく、教育的事実となって示されなければならない、—中略— 今回の提案は、まさにこれ等の要請に答えたつもりである」というように<sup>19</sup>、アイディア先行で実質的成果を十分にあげられなかったというこれまでの反省に基づき、個人の成長に焦点をあててカリキュラム・プランの改善を目指したのだった。

1953年のカリキュラム編成は「中心課程」「基礎課程」に「日常生活課程」を加えた三層構造をとった。「日常生活課程」は、1949年には「生活歴」、1950年には「日常生活」課程として設定されていたものの、初期のカリキュラム構造では「おおまかに学校歴として示すにすぎなかった」ものであり、それを、「学園の生活を民主化し、豊にする為に子ども会の活動を中心として、学習計画以外の全生活分野を組織化し、計画化」するとして<sup>20</sup>、明確にカリキュラム構造の中に位置づけたことは、この時期の明石プランの特徴であった。

また明石プランが「中心課程」としてコアを残したことは、1950年代に入りコア・カリキュラムが少数派になる中で「コア・カリキュラム（生活カリキュラム）に基盤をもつ」として総合的なカリキュラム編成をしてきた当初の理念を継続したことを示すもう一つの特徴であった<sup>21</sup>。

では次に、それぞれの課程に音楽にかかわる活動がどのように組織されていたのかをみてみよう。

### 2.2. 「中心課程」の中の音楽の位置づけ

まず、第一に「中心学習」のまとまりを示した「単元計画表」をみると、子どもの生活の場として〈社会領域〉、〈経済領域〉、〈健康領域〉、〈教養領域〉の四つの領域から構成されていた。音楽や美術、演劇など芸術表現にかかわるものは主として「教養領域」において示され、個人差に対応するという点から各学年ごとではなく、低、中、高学年にわけて単元が設定されていた。

この中で音楽に関係すると考えられる単元として次の3つであった。

一つ目は単元「子供演芸会をしよう」（中学年の発達段階）で「友だちと一緒に楽しみ会を計画して、なごやかな時間をもつようになる」ことを目標とし、二つ目は単元「学芸発表会をしよう」で、「自分達の手で学芸発表会を開いて友達と研究成果を分かち合い研究を深めるようになる」を目標とし、三つ目は単元「私達のレクリエーションをどのように改善したらよいか」（高学年の発達段階）で「自分達でできるレクリエーションを選び、友達と楽しく実行出来るようになる」ことを目標として設定されていた<sup>22</sup>。

どれも創作表現自体を中心に、自主的な活動を行う単元であった。1953年の単元では1949年の単元3「明石の町の模型を作ろう」や単元5「日本工具の見学をしよう」でみたような社会科的内容の学習のまとめとして劇活動や計画されなくなっていた。

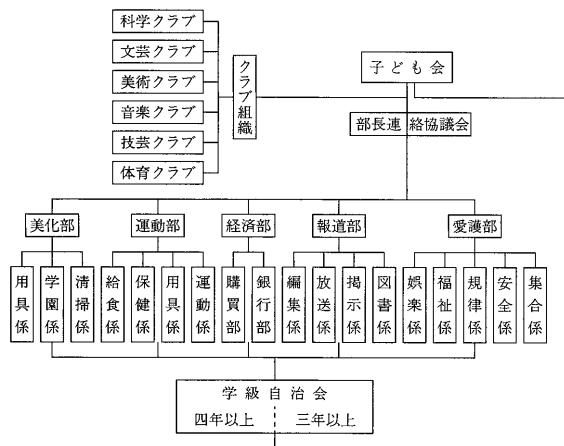
### 2.3 「日常生活課程」の中の音楽の位置づけ

また、上記の「演芸会」や「学芸会」の活動は「日常生活課程」とも関連をもつものだった。

「日常生活課程」は現在の特別活動にあたり、1951

年学習指導要領・一般編ではクラブ活動や児童会などの自主的な活動を「教科以外の活動」(小学校)とし民主主義教育のための重要な領域として設けられていた。さらに、1951年9月に組織された文部省内の「小学校カリキュラム委員会」でも教科以外の活動を教育課程に位置づけるための研究に着手し、1952年には『教科以外の活動の計画と指導』を発行している<sup>23</sup>。そうした中で「日常生活課程」として設置されたものだった。子どもたちの活動は図表1の場所で行われた。

図表1



(神戸大学教育学部附属明石小学校・附属幼稚園『教育実践の新段階—明石附小の前進—』東洋館出版、1953年11月、178頁より)

「日常生活課程」は「日常生活の指導計画表」とし「日常的」内容と「定期的」内容とに区分して設定された。音楽が関係するのは主として「定期的」内容の「報道部」の中にあった。それは低学年、中学年、高学年ともに「音楽会や音楽コンクールに参加する」、「学芸会に参加する」、「お誕生会に参加する」といった表現活動の単位であった<sup>24</sup>。

上述した活動は、全学年がかかわる「子ども会」と三年生以上によって運営される「学級自治会」であると考えられる。

「日常生活課程」の活動の中で音楽は次のように運営されていた。

例えば、「子ども会」が主催する活動の中で、午前10時から10時半までの「レクリエーション」の時間には自由遊びや学校全体での〈声くらべ〉、〈腕くらべ〉〈童話会〉〈お誕生会〉などの企画運営が行われている。

また第3学年以上が参加する「学級自治会」は毎週1日金曜日の第六時限にそれぞれの場所に集まり「今週の反省と来週の計画を日記をもととして話し合う」活動をベースとし、運動会、学芸会などの行事の際には、各部長、副部長、会長、副会長等が集まり、大綱を決めて各部に伝達し、運営していくとしている。

こうしてみると、学芸会や音楽会はその内容からし

て、「中心課程」と重なりながらも「日常生活課程」の中心的な活動になっていたと考えられる。

また、この際「各部長の連絡協議会には教師」も参加し、学校の側としての意見を一応述べる。然しこの意見はあくまでひとつの参考資料として児童の側に取り上げられるのであって、学校側の案として一方的に児童の側に押しつけられるものではない。教師の言は常に指導助言の域を超えるものであってはならない」としている<sup>25</sup>。

即ち、「日常生活課程」は教科以外の子どもたちの学校生活でのさまざまなことを自主的に運営していくことが重要な方針として設定され、そこに音楽を含めた創造的表現活動が想定されたといえる。

1949年のカリキュラム編成の「中心学習」では「明石のまちの模型をつくろう」(第3学年)のように社会的的内容をもった単元の中に音楽活動を取り入れていたのに対し<sup>26</sup>、1953年の「中心学習」や「日常生活課程」の中では文化的行事や創造的な表現活動にかかわり、内容として組織化しやすい単元に限定し、その自主的運営を含めた音楽学習が設定されていたことがわかる。

## 2.4. 「基礎課程」の中での音楽科の構成方法

それでは、「基礎課程」の「音楽的分野」における学習指導計画の具体的内容について、中学年を例に検討してみよう。

表2 第3学年の「音楽」の「主題計画表」(1953年)

番号	中学年の発達段階
	主 題
1	5線の呼び方
2	発想記号と標語
3	音名と階名
4	音部記号の書き方
5	音符の書き方
6	楽譜の写し方(文部省こいのぼり)
7	歌詞のつけ方(みなと)
8	小節の完成の仕方
9	輪唱の仕方(こだま)
10	頭声発声の仕方(春ドイツ曲)
11	2部合唱の仕方(川岸ウェーデル)
12	シロホンの打ち方(元気な子供)
13	ハーモニカの吹き方(せいくらべ)
14	楽器の組合せ方(みなと)
15	リズム形の組合せ方
16	ハ長調の読譜の仕方(春の小川)
17	ヘ長調の読譜の仕方(野ぎく)
18	ト長調の読譜の仕方(夜汽車)
19	さぐり読みの仕方(さんぽ)
20	6拍子の捉え方(寒い朝)
21	拍子の聞き分け方
22	標題音楽の聞き方(アメリカ巡邏兵)

(神戸大学教育学部神戸大学教育学部附属明石小学校・附属幼稚園『個人差を生かすための研究』1953年11月、147～148頁より作成)

表2のように1949年の明石プランでは「中心学習」に関連した形で「音楽」の内容の多くを決定していたのに対し、1953年の音楽の「基礎課程」では音楽的な内容のまとまりによる単元に変わり、主題が設定されたことが大きな特徴である。

主題は「生活主題ではなく能力主題」の設定を行うとされた<sup>27</sup>。音楽の主題では児童の獲得すべき音楽知識、技能の内容を「主題計画表」として設定している。

例えば、主題13「ハーモニカの練習」では「○ドミソの音は吹き他の音は吸うことを知り、音階や音が自由自在に吹けるようになる」ことを目的とし、主題16「ハ長調の読譜の仕方(春の小川)」では「○主和音の音(ドミソ)の位置を知ってその他の音符は音階の系列をたぐって読めるようになる」ことを目標とするように<sup>28</sup>、音楽的な技能を身に付けるための目標を具体的に設定していったことがわかる。

音楽指導の方針では「個人差を認識すればする程、一斉指導だけでは足りずどうしても個別に見てやる必要が起る」とし<sup>29</sup>、そうした学習を支援、補強するためのドリル教材が作成されていた。

例えば図表2のように、「ハーモニカの練習」では○印のドミソは吹く音、レファラシは吸う音としたカタカナ譜のドリル教材を作り、個々人が出来た時点で教師にチェックを受けるという方法をとって個別の技術の習得の方法を探究していた<sup>30</sup>。

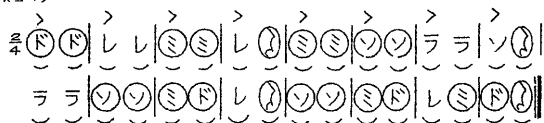
図表2 「ハーモニカの練習」

## 2. ハーモニカの音階

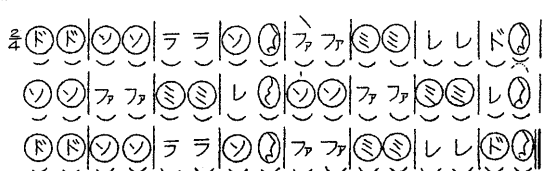
ハーモニカのれんしゅう 吹く音……○●●○  
すう音……レファラシ

(注意) 片足のつま先で足を下したら、はんぱくですから、1ぱくは(あげて)地面に下して(もとのようにあげる)足先でひょうしを とりながら れんしゅうすること。休みのしるしもひょうしをとります、たての線のはじめは強くします。出来たら先生に聞いてもらいましょう。

(練習1)



(練習2)



(神戸大学教育学部神戸大学教育学部附属明石小学校・附属幼稚園「個人差を生かすための研究」1953年11月、152頁より作成)

1953年の資料は、具体的な教育課程表ではなく、「主題」と「目標」を示しただけのものであり詳細は不明である。しかし、1949年の明石プランに比べると、コアに関連した楽曲教材を使用するのではなく、音楽科の目標に即して教材を設定し、また音楽技能の系統的

な学習を個々人の進路にあわせて行く形へ変わっていったことがわかる。

## 3. 1957年の教科指導と生活指導

### 3.1.教科指導と生活指導からなるカリキュラム

1957年になると明石附小は1957年には『教育の実践的研究—新しい教科指導と生活指導』(研究紀要15)を発表し、カリキュラムの改正を行った。

1953年の「個々人差に応じた教育」の実践を総括し、生活教育を基本原理とすることは評価できるものの「中心課程の性格が弱く明確さを欠いてきたこと」とあわせて「生活単元と日常生活課程の内容との区別があいまい」であったこと、また「一日のプログラムがあまりにも忙しすぎた」こと、個人差を活かす方針については「それぞれのグループで子どもたちは、安定感をもって学習を進めるようになった」反面、「真に要求に根ざすというよりも、その場の思いつきや一時的な興味や友人に引きずられて学習を進めようとする傾向に向かった」といった反省がなされた<sup>31</sup>。

その結果「カリキュラムの進歩性は、その形の上でできるものではなく、どういう原則にたって教科を教えるかという、教科内容の指向によってきまるものである」とし、教科学習と生活指導の二つの領域によって全体構造を考えるという方針をとり、あえてカリキュラムの構造は提示しなかった。教科指導については文部省の示した八教科を指導し「主として客観的な教材系統にしたがって知的指導を行う学習の場」とし、生活指導は「主観的な児童の側からとらえた指導であり、性格と行動の変容をもたらすため実践そのものを目指すと共に実践のための問題解決の知性心情を養うもの」として位置づけ、「この二つの機能が相互に関連して望ましい教育が行われる」とした<sup>32</sup>。

この中で、社会科はこれまで同様に「単元」を単位とし、「学習経験の一つのまとまりで、その全学習活動は児童の明確な意識で一貫されている」とし、他の教科は「主題」を学習の単位とし「知識技術の一まとまりを示すもの」として分けた<sup>33</sup>。社会科は単元をもってコア「中心学習」という位置づけではなく、一教科となり、実質的にコア・カリキュラムは無くなり、教科カリキュラムになったといえる。

1957年の改正に先立ち、1956年9月には各教科ごとの教育課程試案が発行された。音楽科の教科課程を第3年を例にみてみよう。

### 3.2.1956年の音楽科教育課程

表3のように、1953年の主題(表2)と比べてみると若干変更があるものの、音楽的なまとまりによって主題設定しているところは共通であった。1953年の主

題は一つの楽曲教材を設定していたのに対し、1956年のプランでは複数の楽曲教材を主題の教材として設定していた。また、1949年の「中心学習」の内容に即した生活経験的な単元設定や教材選択に比べると音楽的なまとまりの主題による設定は、対照的なものになっている。

表3 第3学年の音楽科の主題（1956年）

番号	主 題	教 材
1	春の喜び	歌曲「四月」、レコード「声楽曲」、歌曲「ひばり」
2	譜を読むけいこ	歌曲「えだの小鳥」、歌曲「シロホンとタンブリン」歌曲「山のうた」
3	楽器のけいこ	歌曲「みなと」、レコード（楽器の音色）、歌曲「くつがなる」
4	いろいろなふし	歌曲「海へ行こう山へいこう」「えだの小鳥」「夢の馬車」
5	秋のリズム	歌曲「なわとび」
6	たのしい輪唱	歌曲「夢の馬車」、歌曲「とけいのうた」、歌曲「月夜のみち」、歌曲「えんそく」、
7	合奏のけいこ	歌曲「秋」
8	ハ長調の読譜	歌曲「やきゅう」、歌曲「むらまつり」、歌曲「のぎく」
9	ふしあつめ	歌曲「えだの小鳥」
10	美しい音楽	
11	学芸会	歌曲「はごろも」
12	ハ長調の読譜	歌曲「はたらく尾山」、歌曲「うぐいす」、歌曲「おまわりさん」レコード「ミュゼット」、歌曲「ヘリコプター」、歌曲「春をまつ」

（神戸大学教育学部附属明石小学校「音楽教育課程試案」、1956年9月、第3学年より作成）

1949年の音楽活動との関連で資料をみてみよう。単元3「明石市のまちの模型を作ろう」（表1）で使われていた歌曲「みなと」は、模型展覧会において歌う教材として設定されていた。1956年の資料では、主題3「楽器のけいこ」の中で使われている。

1956年の授業案では、「みなと」を唱謡し、これに「楽器で吹奏してみよう」という導入から「○楽器について話し合う」「笛の持ち方、ハーモニカの持ち方」「とりあつかいの注意について」を話し合い、絵譜を使いながらグループ練習を行っている。

また笛は「指のおさえ方と息の強さによって音が作られることをわからせる」とし、ハーモニカは「ドミソの音を吹き、他の音は、すうことをわからせる」といった前述のドリル教材を活かした技術的な課題が具体的に提示され、さらに「○各人によって進度が異なるから、吹けるようになったものは『シロホンとタンブリン』を練習する」というように、個人差への対応もしようとしており、技術的な課題を具体的に把握し、またグループ活動を活用しながら授業を計画してい

る<sup>34</sup>。

もう一つ、作曲活動については第3学年では主題4「いろいろなふし」と主題9「ふしあつめ」の二の創作に関係する主題をもち、作曲の導入的な学習が計画されていた<sup>35</sup>。さらに、全学年を通じて1つから2つのふし作りに関係した主題が設定され、低学年の「短いことばの問答からのふし遊び」から、中学年の「いろいろなふし」では「みなさんおはようございます」のあとに「せんせいおはようございます」を即興するという、「日常の会話を主にした」即興の歌問答や記譜、高学年では提示された和音や形式を意識した旋律づくりまで、学年の段階を追ってふしづくりを学習するためのカリキュラムが設定されていた<sup>36</sup>。

実際には、日常会話の歌問答の模範例はハ長調を主としていた。これは話言葉から派生するのであれば、本来は「民謡の四度のテトラコルド」のようなわらべうた的な音律を使用した方が自然であり、不自然さは残るものの、児童の発達段階と音楽の段階性を具体的に考えていたことがわかる。

1949年の単元「明石のまちの模型を作ろう」ではてん充法による作曲として小節の穴埋めをする学習が単発的に行われていた。これは「中心学習」のテーマに関連して、作曲の技術の系統性よりも題材の流れの中で作曲を行おうとしたものであり、そこで段階的な音楽的なまとまりを求めることは困難であった。

しかし、1956年度の主題では児童の発達段階と音楽的なまとまりの「主題」を各学年での系統性とを優先的に考えた主題設定になっていることがわかる。

### 3.2 音楽科教育課程案にみる主題「学芸会」

では、最後に1953年では主とした「日常生活課程」で行われていた音楽的な活動、とくに「学芸会」が1956年の生活指導の中でどのように扱われているのかをみてみよう。

1956年の「音楽教育課程案」の中の主題には生活指導とも結びついたものがあつた。これは1953年の三層からなるカリキュラム構造では明確に見えなかったものである。

例えば、第3学年、4学年は運動会との関連で、第3学年は「鼓笛を演奏」、第4学年では「鼓笛バンドに参加してマスゲームができる」というようになることが目標に設定されている<sup>37</sup>。また主題「学芸会」は全学年すべてに1月中旬から2月中旬にかけて設定されており、全学的な行事と結びついていた。

第3学年主題11「学芸会」の授業案では、歌唱活動は歌曲「はごろも」が教材として決まっており、合唱のどちらのパートも歌えるようにする指導を行っている。合奏については「児童の好みを考えて曲を決定」したり、「パートごとのグループ練習をつくって練習」をし、「時間のはじめと終わりには、全体で合わせてそ

の時間の目標を整理する」というように、児童がなるべく主体的に参加できるような配慮がみられた。

その他、1957年の資料には「音楽を通しての生活指導」というタイトルでこれまでの「日常生活課程」に含まれていた活動と音楽のあり方が述べられた。それによると、学芸会の指導上の留意点として以下の10項目があげられていた<sup>38</sup>。

- (1) 学習主題「学芸会」の学習計画にあたっては児童の計画を尊重する。
- (2) 児童の作品を発表する。
- (3) 各学級の歌や器楽を発表する。全校合唱・全校合奏を発表する。
- (4) 音楽クイズ的なものを劇化する。
- (5) 児童のオペラを上演する。
- (6) 単に合唱や合奏を演奏するのではなく、曲や編成についても簡単に説明する。(プログラムにも書く番組について説明する。)
- (7) 参加者の全員合唱をする。
- (8) 専門家の演奏を加える。(教育者の演奏でもよい)
- (9) 教師、PTAの演奏も加える。
- (10) 学芸会後には学習計画表によって自己の演奏、態度、他人の演奏等について評価する。

これらをみると児童だけでなく(8)、(9)のように専門家や教師やPTAも参加する交流をめざし、

(1)、(10) などのように、児童の自主的な参加を意図し、また(2)、(3)、(5)のように児童自身の創作表現の場となることを目指しており、1949年のプランの創作表現活動と比べても、音楽内容としては児童の作品、合唱、合奏、児童オペラ、音楽クイズなど充実していることがわかる。

他方、ステージ上では「とくに姿勢に気をつけさせる」「楽器を奏かない時に態度に気をつけさせる」「鑑賞面を重視する」といった学習態度の躰に重きがおかれ<sup>39</sup>、全学年でも演奏時並びに聴き方についての態度について反省会で話し合うことが組み込まれていることも特徴である。

1953年に発行された文部省の『音楽科指導書』では、学芸会などの学校行事について「いかに演奏の内容を鑑賞するかという内容的な指導とともに、社会における音楽会等、集合のしつけ、良い習慣などを徐々に身に付けさせていきたい。(たとえば、会場の出入・談話・拍手など)」というように躰の場として捉えている<sup>40</sup>。

ただし学習が児童らの自主的なルール作りの中で行われず、教師主導の学習態度の指導や躰の場に傾けば、1953年の「日常生活課程」で目指していた理念にそぐわないものとなる危険性を孕むことになる。

磯田一雄は小学校の「教科外の活動」、中学校・高等学校の「特別教育活動」が、1958年の学習指導要領の改訂では「道徳」とあわせて「学校行事等」の領域と

ともに教育課程に定められたことにより、その目標や内容の多くが、二つの領域に吸収され、またその性格も変化・矮小化してしまったと批判している<sup>41</sup>。

例えば、「教科外の活動」にみられた「子どもの実態に応じて、諸活動を発展的・育成的にとらえる立場」は「特別教育活動」では、「クラブ活動」「生徒会」(小学校では「児童会」)「学級会活動」のような活動類型が押しつけられるようになり、このような画一化は「子どもたちの自治的集団的活動を、自ら創りあげていくもの、としてではなく、上から与えられたものとしてとらえさせ」てしまっているという批判である<sup>42</sup>。

1957年の資料では、学芸会について「発表の為に特別な時間をとらず教科カリキュラムに学芸会の位置づけをする」とあり<sup>43</sup>、音楽科の授業を中心に計画されるようになっていったことが示されている。この資料だけでは、学芸会自体の企画運営が子供会なり学級自治会とどういう形で連携して行われるのかということは見ることができない。

しかし、磯田の指摘を鑑みれば、「日常生活課程」において行われていた活動の中心が教科カリキュラムへと移行したことで教師主導になり、児童の自主性に基づく自治的な活動は自ずと制約が生じていったと考えられる。

また、1958年の学習指導要領では「学校行事」は「指導計画作成および指導上の留意事項」の中で「集団行動における児童の規律的な態度を育てることなどにじゅうぶん配慮する必要がある」というように集団行動で規律的な態度形成の場として位置づけられた。

さらに、学芸会とは別に、とりわけ音楽は学校行事に関わり「国民の祝日の儀式」での「君が代を斉唱させることが望ましい」と記されたように、儀式の中での指導が一層強調されていく時代へと向かっていったのである。

## まとめにかえて

本章では1949年のカリキュラム・プランを起点とし、1950年代に改編されていった明石附小のカリキュラム編成の原理を音楽科の教材構成に焦点をあてて検討した。明らかになったことは以下の通りである。

明石プランは1949年から1950年代にかけて大きく3度のカリキュラム編成の改正を行った。

第一は、1949年のコアを中心にカリキュラム全体の統合を図ろうとしたカリキュラム・プランの改編である。音楽活動は「基礎課程」のみならず、コア「中心学習」の中にも積極的に取り入れられていた。

この中で音楽の教材構成は、既成楽曲を単位として教科内でのまとまりを図る典型的なものだけでなく、コアの学習の総括として行われた劇活動や誕生会や学芸会など創作表現活動それ自体を目的とした活動が見られた。こうした子どもの経験の中に多様な学習



を統合しようとした試みは、これまで教科内での既成楽曲の再表現活動に限定されがちであった音楽科にとって革新的な試みであった。

しかし「明石の模型を作ろう」の活動例にみられたように、実際に創作活動を子どもたちが自主的に企画運営していくための前提には、子どもたちの音楽的知識技能の習得の保障や学習の系統性という点で多くの困難があったことが資料や聞き取りから明らかであった。

第二は、1953年の「一人一人を生かす学習指導」を提唱し、コア「中心学習」と「基礎課程」「日常生活課程」の三層からなるカリキュラムの改編である。これは、それまでの「生活一本の思想、コア一本の考え方」において編成された「中心学習」の中で行おうとした子どもの経験の統一と教科内容の系統性の両立の困難を「日常生活課程」と「基礎課程」の分化によって改善しようとしたものとみることができる。

この「基礎課程」の音楽は楽曲を単位とし、音楽能力別の主題によって教材構成がなされた。またコア「中心学習」や「日常生活課程」での音楽的な活動は、学習の総括としての劇ではなく、学校行事や創作表現活動に限定された。しかし、音楽科の学習と「中心学習」「日常生活課程」の関連性は明確ではなく、なおかつ「中心学習」と「日常生活課程」との違いも曖昧であったものの、音楽科のこうした取り組みは個々人の確実な音楽的能力の習得とそれに基づいた表現活動を自主的に展開する場として構想されたものであり、音楽学習の具体的内容をもった活動を現実的に実践していく可能性を示していた。

第三は、1957年のカリキュラム構造よりも内容に重点を置き、特定のカリキュラム構造をもたず、教科学習と生徒指導の二つの領域を設定したカリキュラム改編である。これは1953年のカリキュラムで形骸化した「中心学習」を社会科として引き取り教科カリキュラムへ移行したものとしてみることができる。

1957年の音楽科の教材構成では1953年の音楽的なまとまりによる主題を引き継ぎ、各学年の段階的な学習を配慮した計画がたてられていた。また学芸会や運動会といった行事と音楽科の授業との関連性をもった計画がたてられた。音楽科カリキュラムの中に位置づけられた「学芸会」は音楽的内容においては格段の向上を示す一方で、教材として固定化される中で従来の「日常生活課程」で重視していた児童の自主性や活動の柔軟性を確保していくことが課題として考えられた。

以上のように1950年代の明石附小のカリキュラム編成の変遷は子どもの経験の総合と教科内容の系統性との両立を目指す過程であった。1950年代後半には「単元」はその機能を消失し、経験の総合は「日常生活課程」を経て生活指導へ、教科の系統性は教科カリキュラムへと分化する形でそれぞれの学習の充実を試みて

いった。

一方1958年の学習指導要領改訂により、教育課程編成は「教科」「道徳」「特別教育活動」「学校行事」の領域として規定される中で、戦後初期に掲げた「教育の全体計画に基盤をもつ」とする総合性をもったコア・カリキュラムの理念の保持は制度的に画一化され制限されていくことになる。音楽も関連した学芸会等は「学校行事」の領域に含まれ、これは、一つには集団行動の規律訓練の場として、あるいは「国民の祝日の儀式」での「君が代」斉唱が明記されるように、外的な縛りの強化を象徴する中に位置づけられた。それ故、1960年代にかけての音楽科並びに教科外のカリキュラム編成とその実践は、固定された教育課程編成の枠組みの中で、児童生徒の自主性発揮と集団行動による自立訓練という対向的な目的のもとに、できる限り前者の目的を実現するための教育実践の構築が課題となっていたと考えられる。

しかし、こうした実践が具体的にどのように展開されたのかということについては、地道な聞き取りや具体的な授業記録等によるさらなる検討が必要である。その検討については他日を期したい。

- 1 拙稿「戦後改革期の音楽科の教材構成」日本カリキュラム学会『カリキュラム研究』第7号、1998年、107頁。
- 2 津田正之「戦後改革期における音楽科単元構成の歴史的検討—単元学習の衰退をめぐって—」東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科芸術系教育講座音楽教育学研究室編『音楽教育学研究論集』創刊号、1999年、44～53頁。
- 3 拙稿「戦後改革期における音楽科の学習構成の展開—雑誌『教育音楽』の内容分析を中心として—」日本教育方法学会編『教育方法学研究』25号、1999年、119～127頁。
- 4 磯田一雄「コア・カリキュラム運動におけるカリキュラム構造理論の展開」肥田野直・稲垣忠彦編『教育課程（総論）』東京大学出版会、1971年、549～550頁。
- 5 拙稿「戦後改革期におけるコア・カリキュラム編成と音楽教育」教育史学会編『日本の教育史学』第41集、1998年、96～114頁。
- 6 同上書、96～114頁。
- 7 明石女子師範附属小学校『研究紀要四明石附小プラン（試案）』1948年。『小学校のコア・カリキュラム 明石附小プラン』誠文堂新光社、1949年5月。
- 8 同上書、『小学校のコア・カリキュラム 明石附小プラン』、22～23頁。
- 9 新潟第一師範学校男子部附属小学校『研究と実践私たちのカリキュラム昭和24年度』1949年。
- 10 肥田野直・稲垣忠彦編『教育課程（総論）』東京大学出版会、1971年、77頁。
- 11 同上書、191頁。
- 12 清水一郎「劇遊戯の指導」『カリキュラム』第6号、1949年6月、17頁。
- 13 前掲書、『小学校のコア・カリキュラム 明石附小プラン』、1949年、14頁。
- 14 兵庫師範学校女子部附属小学校「単元展開の資料と手引き（試案）3 明石のまちの模型をつくろう」1949年6月。
- 15 同上書、5、23頁。

- 16 同上書、7、23頁。
- 17 神谷好へのインタビュー、1997年9月3日(水)於：兵庫県西宮市の自宅。
- 18 神戸大学教育学部附属明石小学校・附属幼稚園『教育実践の新段階—明石附小の前進—』東洋館出版、1953年11月、4頁
- 19 同上書、4頁。
- 20 同上書、4、5頁。
- 21 筆者が調査した1948年から1956年までに作成されたカリキュラム・プラン103件のうち1953年に発表されたものは7件、その中で6件は教科カリキュラムであり、コアをもつのは明石プランのみであった。(前掲書、拙稿「戦後改革期の音楽科の教材構成—教育委員会・小学校作成のカリキュラムの分析を中心に」、107頁。)
- 22 同上書、40～41頁。
- 23 文部省『初等教育パンフレット2教科以外の活動の計画と指導』、牧書店、1952年8月、1頁。
- 24 同上書、47頁。
- 25 同上書、176～177頁。
- 26 前掲書、『小学校のコア・カリキュラムプラン—明石附小プラン—』
- 27 同上書、135頁。
- 28 同上書、148頁。
- 29 同上書、242～243頁。
- 30 神戸大学教育学部神戸大学教育学部附属明石小学校・附属幼稚園『個人差を生かすための研究』1953年11月、150～153頁。
- 31 神戸大学教育学部附属明石小学校『教育の実践的研究—新しい教科指導と生活指導—』(研究紀要15) 1957年11月、3～4頁。
- 32 同上書、6頁。
- 33 神戸大学教育学部附属明石小学校、前掲書、1957年11月、3、9頁。
- 34 神戸大学教育学部附属明石小学校「音楽教育課程試案」、1956年9月、第3学年4、5頁。
- 35 同上書、第3学年6、5頁。
- 36 同上書、第3学年、全頁。
- 37 同上書、第3学年1頁。第4学年1頁、
- 38 神戸大学教育学部附属明石小学校、前掲書、1957年、167頁。
- 39 神戸大学教育学部附属明石小学校、「音楽教育課程試案」、1956年9月、第3学年8、9頁。
- 40 文部省『小学校学習指導書音楽科編』教育出版、1953年10月、54～55頁(中村紀久二監修『文部省学習指導書』第14巻、大空社、1991年)。
- 41 磯田一雄、前掲書、448頁。
- 42 同上書、446～447頁。
- 43 同上書、167頁。